50th anniversary

法人創立50周年に寄せて
CONTRIBUTION

内部監査人 工藤 清孝

未来に向けて

農協共済別府リハビリテーションセンター創立50周年おめでとうございます。

私がこの法人で創立50周年を迎えることができたのも、入職から現在に至るまで様々な形でご指導、ご支援いただいている皆様のおかげと心より感謝しています。

さて、創立50周年にあたり企業の寿命について考えてみたいと思います。有名なものは「日経ビジネス」が1983年に発表した「会社の寿命30年説」です。何を寿命と捉えるかによりますが、「企業の最盛期は30年続かない」が趣旨のようです。

「会社の寿命30年説」では企業が衰退を迎える要因は、①経営者が変身する努力を怠る。②無謀な多角化によって事業の命を絶やす。の2つで、寿命を超えている企業は「変身」できる企業だそうです。

創立50周年を迎えた当法人はどうでしょうか?

当法人の50年の歩みを私なりに次の3つの時代に分類し、考察してみました。

①唯一無二の時代(ブルーオーシャン時代)
1973年～1999年(27年間)

法人設立の経緯から特別な存在で、リハビリテーションも今のように一般化していない時代であったため、競合相手がほとんどいない状況でした。入院、入所ともに常に満床状態でした。

リハビリテーションの普及啓発に努めたこの時代がいわゆる最盛期なのかもしれません。

②競争の時代(プロダクトアウト時代)
2000年～2013年(14年間)

2000年に回復期リハビリテーション病棟の新設、介護保険制度の開始、2006年に障害者自立支援法の施行により、事業所間での競争が激化しました。

当法人の特長を関係機関や利用者に強く打ち出すことで競合事業所に対しての競争優位を保ってきた時代です。

③協働の時代(マーケットイン時代)2014年～現在

2014年の医療介護総合確保推進法による「地域包括ケアシステム」により、事業所間競争の時代から、それぞれの事業所が役割を分担し地域で支える時代に移りました。地域ニーズを捉え地域での役割を果たせる事業所への「変身」が強く求められています。

このように、当法人に求められるものは時代とともに変わってきましたが、住み慣れた街で家族と一緒に暮らし続けたいという人の気持ちに変わりはありません。その点において「すべての人が地域でしあわせに生活できる社会の実現」は今後も変わらない法人の理念だと思います。

また、それを支えているのは地域、関係機関の人々の「相互扶助」の精神であることも変わりありません。創立50周年は、地域、法人内、そして家族間において、お互いが助け合うことの大切さを、法人設立の原点を見つめ直す良い機会です。

一方で、企業の寿命を大きく超えた当法人が、今後、第二の最盛期を迎えるためには「地域包括ケアシステム」において、地域連携の中核を担える組織に「変身」する必要もあると考えます。

創立50周年は、農協共済別府リハビリテーションセンターの「新たな未来に向けて」のキックオフです。

法人創立50周年に寄せて

社会福祉事業部
にじリハビリテーション課
課長

笹原 紀子

利用者とともに、小さな挑戦を重ねて

私は、障害者支援施設「にじ」で勤務して17年が経ちました。この間、利用者さんの目標の多くは「地域・社会への復帰」であることに変わりはありませんが、障害を持つ方を取り巻く環境や法律、また、施設での訓練やサービスは変化を遂げてきました。

私自身も、「にじ」では、作業療法士として訓練や実務の担当から始まり、8年前から就労移行支援を担当、3年前には就労定着支援事業の立ち上げなど、業務も変化してきています。

就労移行支援担当中は、多くの利用者さんと就職活動を行いました。利用者さんと、ハローワークに行く、履歴書を書き面接を受ける、実習体験などで他企業の内部に入れていただくなど、知らなかった仕事や世界を知り、利用者さんとともに、緊張したワクワクする体験ができました。障害があっても「働きたい」という強い思いで訓練に取り組む利用者さんの姿を見ると、私は支援者として「挑戦する」ことを諦めてはいけないと強く思うのです。失敗も多くあった私の「小さな挑戦」の数々。しかし、利用者さんの就職が決まった時は最高に嬉しくて、「あの日があったから今がある。無駄なことはなかった」と思えるのです。

さらに、就労定着支援事業では、地域で働く利用者さんから直接お話を伺えました。「仕事が出来るのは〇歳まで」「在宅が難しくなれば施設かな」「頑張ったけどまた手術」そんな不安や本音が飛び出します。障害を背負いながら、覚悟を持って社会・地域生活をされている姿を目の当たりにし、障害者支援施設において「就労」はゴールではないこと、障害や病気と闘いながらの生活が続くことを、私達も覚悟して送り出す必要があることを知りました。

振りかえると大変なこともありましたが、利用者さんの思いや覚悟に心動かされ、今日まで仕事を続けて来られたことに感謝しています。そしてこれからも、利用者さんとともに、私の「小さな挑戦」を重ね続けていきたいと思っています。

診療部
部長

藤原 寛功

別府リハビリテーションセンターと私

私は、別府市出身で2013年7月に当センターに入職しました。今年度で年は49歳になり、当センターより1年後輩になります。元々の専門は脳神経内科で、2018年3月にリハビリテーション科専門医を取得し、2022年4月から診療部部長に任命されました。先輩や同僚の医師の方や、周囲のスタッフに手取り足取りお世話になりながら何とかやってきて、気が付いたら病棟医師の中では私が2番目に勤続年数が長い状態となっていました。

私の父親は別府の急性期病院で理学療法士として定年まで働いており、同じように別府でリハビリテーションに携わる仕事を続けることができ、幸せを感じております。これまでに当センターの回復期リハビリテーション病棟をめぐる環境にも大きな変化があり、2022年度からは回復期リハビリテーション病棟入院料1施設基準を満たすため、新規入院患者のうち4割以上の重症者受け入れが要件となりました。病棟も私が入職したときは少しのんびりした雰囲気もありましたが、重症患者が増えて業務量も増加し、また新型コロナウイルス感染症対応などもあり、気が抜ける時間がない状況となっています。

当センターでは、多職種連携によるチーム医療を推進していますが、チーム医療のあるべき姿として、「患者さん・ご家族とともに、医師をチームリーダーとする多職種で、目標達成に向けて最善を尽くす、リハビリテーションマインドを持ったチームを形成し、それぞれのメンバーが高い専門性を発揮するとともに、職種の垣根なく意見交換を行い、互いに尊重し補完しあうことで最良のリハビリテーションを提供していく」ということを掲げ、これを達成するために2022年度より、入院初日の流れ、カンファレンス実施体制、退院後のアフターフォロー体制の再構築などを行ってきました。チーム医療のあるべき姿を実現するため、当センターも私も今後さらに良い方向への変化と、一層の努力が必要になるのではないかと思っております。

地域連携室
主任

高月 宏明

「成長できる環境」に感謝

私は、平成18年6月に介護福祉士の臨時職員として当センターに入職し、通所リハビリに配属されました。上司や先輩に恵まれ、同僚にも支えていただき、嘱託職員を経て平成20年4月から正職員になることができました。人生の再スタートが切れたことに感謝しています。

通所リハビリの支援員として在宅の利用者を支援していく中で、「もっと勉強して違う角度から支援したい」と思い、平成25年に介護支援専門員の資格を取得しました。当時、当センターには居宅介護支援事業所「みどり」があり、在宅の利用者・家族のために地域の関係機関と連携しながら働いている介護支援専門員の姿に憧れ、私もいつか同じように活躍したいと思っていました。しかし、ちょうどその頃に「みどり」が休止（後に廃止）となり、実務に従事する機会はなくチャレンジは夢で終わりました。

しかし、新たな学びやチャレンジを応援してくれる職場の風土を感じ、当センターで働きながらもっと成長していきたいと思いました。

介護福祉士として充実した日々を送っていましたが、回復期リハビリテーション病棟に異動した年に、先輩社会福祉士が医療ソーシャルワーカー（以下MSW）として働いている姿を見て、「私も社会福祉士として仕事がしてみたい」と、若き頃の志が甦りました。私は、福祉系の大学を卒業しており、社会福祉士の受験資格を持っていました。国家試験に何度も落ちた過去があり取得を諦めていましたが、毎日早朝に起きて勉強を続け、働きながら2年で合格することができました。合格したことで自分自身のケジメがつき満足していましたが、令和4年度から地域連携室へ異動になり、MSWとして職種変更のチャンスをいただきました。現在は1年目のMSWとして、上司や先輩のご指導を仰ぎながら、人生2度目の再スタートを楽しんでいます。MSWもとても難しい仕事ですが、介護福祉士としてのマインドを土台に、さらなる成長を目指していきたいです。

看護・介護部
A棟看護・介護課
課長

山本ゆみ子

仲間とともに

私は、平成15年に当センターに入職し、このたび永年勤続20年を迎えました。20年を振り返ってみると、たくさんの出来事が思い起こされますが、そのほとんどが仲間との楽しい思い出です。「仲間」を辞書で調べると「仕事、勉強、遊びなど物事を一緒にする友人。また、物事を一緒にする集団」と記されています。当センターに入職してからの20年をともに過ごした仲間は、私にとってかけがえのない人生の財産であると感じています。

令和4年度に課長となったことから、看護専門職として必要な管理に関する基本的知識・技術・態度を習得したいと考え、認定看護管理者教育課程ファーストレベル（以下、ファースト）を受講しました。看護・介護部では部長・次長をはじめ、課長と課長補佐の全員がファースト受講を終えています。慣れない課長業務とファースト受講の両立は思った以上に大変で、投げ出したいと思うことも多々ありました。けれども、ファースト受講の先輩方や仲間のサポートにより、何とか無事に乗り越えることができました。

講義で学んだ看護管理者の役割は幅広く、取り組まなければならないと感じる看護管理上の課題は多数あると感じています。しかし、同時にすべてに取り組むことは難しいため、多数ある課題の中から、緊急性・重要性などを考慮し、自身が取り組むべき最優先課題や重要課題をしっかり見極める必要があります。自分だけでは成し遂げられない目標でも仲間とともに知恵を出し合い、それぞれの強みを活かしながら、達成に向け取り組んでいきたいと思います。

看護管理者としてまだまだ未熟であり、業務に追われる日々が続いていますが、今後は自分自身が仲間にとってのサポート役になれるよう、先輩方や仲間からの学びを吸収し成長していきたいと思います。そして、この先の20年も楽しい思い出を増やせるよう、かけがえのない人生の財産である仲間に感謝し、大切にしていきたいと思います。

法人創立50周年に寄せて

リハビリテーション部
次長

福澤 至

50年

生誕50年を迎えた別府リハビリテーションセンター氏と私が出会ったのは彼が21歳の夏だった。当時私は作業療法部門の実習生だった。私たちは同級生ということもあり、すぐに仲良くなった。

私と会うまでの彼は、生まれながらに重度更生援護施設と病院を有し、2歳にして極東・南太平洋障害者スポーツ大会の会場を務め、当時の皇太子同妃両殿下が訪れた輝かしい経歴を持っていた。それから2度の増床や重度授産施設も有し、20歳でリハビリテーション総合承認施設認可を受けた。福祉と医療を担う彼に「なかなかやるな」と感心した。

彼が私に用意した作業療法室は様々な作業活動の訓練道具が備えられていた。私はワクワクしたものである。さらに彼は熱い思いを持った多くの先輩と部署を超えた交流の機会を頻繁に与えてくれた。今でもお世話になっている先輩方だ。出会いを設けてくれた彼に今でも感謝している。

しかし、彼は楽しさだけを私に与えただけではなかった。実習は厳しい状況に追い込んでくれた。実習の最後に「しっかり勉強しろよ!」と言われ私は学校に戻った。

再会したのは彼が24歳の時である。数年会わないうちに作業療法室はリニューアルされており、学生時代にはなかった通所施設もできていた。彼もこの数年間随分と鍛え上げたようだ。それから介護保険制度が始まるにあたり、彼は27歳にして福祉と医療そして介護の3分野を担うこととなった。その後も障害者自立支援法に伴う福祉事業の新体系への移行や訪問リハビリテーション事業の開始など彼は時代のニーズに合わせた進化をしている。

彼も私も50歳、彼と働き26年が過ぎた。彼には様々な部署で勤務させてもらった。彼が用意してくれた配属先はどこも熱い先輩、熱い同僚、熱い後輩がいた。熱い思い出しか浮かばない。次の50年もこの熱い仲間たちと働きたいものだ。彼の生誕100年は「100年」というタイトルで私がまた執筆しようと思っている。

診療支援部
診療画像課
課長補佐

都地 卓哉

善処を尽くす

私は、平成14年から診療放射線技師としてX線検査業務に従事している。入職して間もない頃の苦い思い出を綴りたい。

股関節を骨折していた高齢女性患者さんの、入院時のX線検査を行うことになった。このとき私は、生意気にも簡単にできると高を括っていた。検査を開始すると「なぜこんなひどいことをするのですか？」「触らないでください」「まだ終わらないのですか？」「私に恨みでもあるのですか？」「家に帰してください」とその患者さんは矢継ぎ早に、言葉で抗議してくる。怒鳴られているのではない。静かに泣きながら訴えかけてくるのだ。心に響く。検査は最低でも30分かかる。途中、やり取りに耐えられなくなり「どうしてもイヤならば今日はやめましょうか？」と尋ねると「最後までやってください」という答えが返ってくるので続けざるをえない。考えうる限りの慰めの言葉と謝罪を繰り返したが役に立たず、互いに苦痛な時間が続くだけだった。退院されるまでの数か月、毎週検査に携わったが最後まで彼女の対応は変わらなかった。検査時だけでなく廊下ですれ違うだけでも不快な顔をされた。私は完全に自信を失った。

治療やリハビリを受け入れることができない方もいる中で気遣いや、やさしさを患者が求めているとは限らない。そもそも検査が嫌なのに時間をかけられては、ゆっくりと嫌がらせを受けていることと変わりない。私に求められていることは、その患者が望んでいることを理解することと、十分な検査情報を取得することの両方を達成することなのだと思い知らされた。あの時どうすれば良かったのかと今でもまだ考え続けている。

今の私はあれから20年以上経ち、研鑽を続け当時30分かかっていた同様の検査を5分で終了させることができるようになった。辛い時間を短くできるようになったとは思う。今の自分ならあの時の検査は、うまくいっていただろうか。やっぱり泣かせてしまうのだろう。しかし、あの時よりマシになっていると信じたい。まだまだ“善処”していかなければいけない。“最善”を目指して…。

介護保険事業部
訪問リハビリテーション課
課長

浅野なるみ

言葉の力

私は、入職後25年間の中で主に介護保険分野での業務に携わってきました。当時、新たな体制を作り上げていく業務内容に、困惑したことを覚えています。そんな中、支えになったのは、上司・先輩方からのご指導、同僚・利用者さん・ご家族からの励ましでした。支えていただいた皆様に感謝するとともに、「言葉の力」の大切さを改めて感じています。ある時、短時間通所リハ開設準備に携わる機会をいただきました。物事を「変化」させるには、大きな準備とエネルギーが必要です。大変さに悩んでいた私を前向きにしてくれたのは、上司のある言葉でした。「前進するためには、できない理由ではなく、『どうすればできるのか』の視点で考えることが大切」と。

変化に対して前向きに取り組む…もうひとつ、忘れられない言葉があります。それは担当させていただいたA氏のご家族からの言葉でした。ご高齢に加え病気の影響で閉じこもっていたA氏。通所リハビリでの支援を通じて元気になったものの体調不良で利用終了となってしまいました。「A氏にとって、良い支援ができたのだろうか」と落ち込んでいたところに、ご家族から「Aさんは、通所リハビリに行くことがとても生きがいやった。最期にここの皆さんに出会えて良かった」とお言葉をいただきました。人生最期の出会い・関わり方で、その方の人生が「良かった」と思えるかどうかに繋がる…これからも、「出会えて良かったと思っていただける支援をしよう」と、前向きに振り返ることができました。

私たちの仕事は「変化」に向き合っていく仕事です。利用者の病気などによる生活の変化、社会情勢による環境などの変化、それに伴う事業所の体制の変化。そのような中、前向きな気持ちにしてくれるのが「言葉」です。言葉ひとつで、気持ちが変わり、それが次の行動へのステップアップに繋がります。これからも、「言葉の力」を大切にしながら、利用者の皆様が活き活きと生活できるよう支援させていただきます。

医療安全・感染管理室
主任

加藤 和恵

素敵な出逢いに恵まれて

2011年に当センターに入職し早いもので12年が経ちました。この12年間に障害者支援施設「にじ」、回復期リハビリテーション病棟、医療安全の分野で働いてきました。

「にじ」では初めて当直業務にあたり、理学療法士では味わうことのできない様々な貴重な経験をさせていただきました。内服介助では看護師気分になり、入浴準備などを通じて介護福祉士気分に、また高次脳機能障害の方を担当させていただき、一緒にメモリーノートや会話ノートを作りました。そのような中で利用者さんの一部分を切り取りアプローチするのではなく、療法士として生活全般をみることの大切さを学びました。

回復期リハビリテーション病棟でも「にじ」と同様に患者・利用者さんの「思い」に寄り添い、「これから」に向き合い、その人らしく前向きに生きていくためには、何が必要か…何ができるのか…チームで何度も話し合い、支援ができることは大きなやりがいであり喜びでした。

現部署の医療安全・感染管理室では、当センターを利用される皆様にとって優しく安全な環境となるよう現場と協働し組織に安全風土を育むことを目標としており、日々悩むこともありますが楽しく仕事をすることができています。

最後になりますが、これまでいろいろな分野を経験させていただき、多くの素敵な出逢いに恵まれ、多くのことを学ぶことができました。そのたびに心の中で大切にしている書籍・言葉があります。鎌田實先生の「言葉で治療する」、渡辺和子さんの「置かれた場所で咲きなさい」です。「置かれたところこそが、今のあなたの居場所なのです。時間の使い方はそのまま命の使い方です。自らが咲く努力を忘れてはなりません。雨の日、風の日、どうしても咲けないときは根を下へ下へと伸ばしましょう。次に咲く花がより大きく美しいものとなるように…」この言葉を大切に、和顔愛語を心がけ、これからも自分らしく歩んでいきたいと思います。50周年に添えて…。

法人創立50周年に寄せて

経営管理部 総務課
課長

宮田 英典

場

私は、JA共済連からの出捐のもと平成16年度から平成22年度に掛けて施工した施設改修事業の初年度に入職し、以来19年、事務員として総務・財務管理・施設管理と様々な業務に携わってきた中、この機に振り返ると改めて当法人の「場」の良さを痛切に感じます。

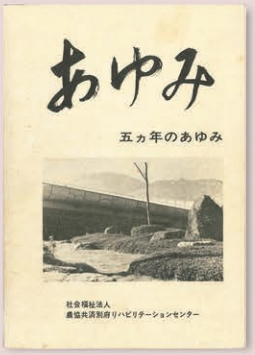
扇山を背景に別府湾を望む約15万㎡の広大な土地に建物面積が約4万㎡にもなる複数の建物、温泉源も有する緑豊かな環境、この「場（場所）」は、入院・入所施設を経営する当法人にとって大きな財産です。しかし、24時間365日使い続けることに加え、特有の温泉環境から消耗が激しく、医療安全の観点から補修や改修が頻繁に発生するなど、建築コストの高騰と相まってこれを維持することは大きな課題でもあります。

当法人は、この「場（場所）」の他に、50年の歴史の中で築き上げた財産として、技術、知識、信頼と「場（ba）」があります。この「場（ba）」は、字そのものを内包する「場所」とは別に様々な要素が相互に作用し合う環境や情報空間を指すものです。

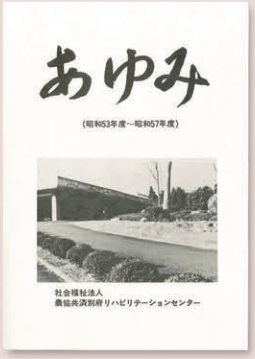
経営学における「場（ba）」の概念の一つに、組織の中での人々の相互作用や関係を指す「組織文化」があります。組織内の共有された価値観、信念、行動パターンの体系が、組織内の人々の行動や意思決定に影響を与える重要な要素となります。他の概念として、競争環境や市場状況があり、競争市場の中で成功するには、市場の変化や競合との動向を把握し、適切な戦略を展開する必要があります。

ダイバーシティの概念が急速に浸透し、定着する中、さらに歴史を刻むために当法人の良さである組織文化も変革・進化させ、高い競争力を持たなければなりません。

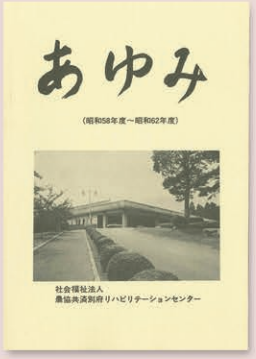
ミドルマネジメントを担う一員として、「場（場所）」を健全な状態に維持し、「場（ba）」の変革・進化のために集団的創造性を促すなど役割を果たし、当法人とともに地域の人々に必要とされ、多くの人々に貢献し続けられるよう努めていきたいと思います。



昭和48年度～昭和52年度

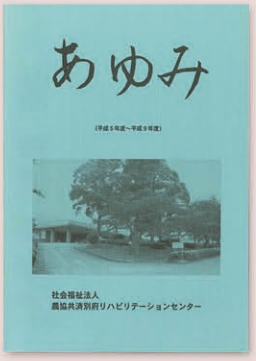


昭和53年度～昭和57年度



昭和58年度～昭和62年度

昭和63年度～平成4年度



平成5年度～平成9年度

平成10年度～平成14年度

平成15年度～平成19年度